2

――十年前――

担任になってから、ずっと気になっている児童がいる。彼は誰よりも早く学校に来て、誰よりも長く学校にいる。最初に彼を見たときは、ああ家が近い子なんだろうな、とか、学校が好きなんだろうな、とかそのくらいに留まっていた。

4月の終わりくらいに、17時過ぎから大雨の予報が出た日があった。

「夕方から大雨だから、皆さん早めに帰るように」

朝の集まりの時間――小学校でもホームルームという言葉を使うのだろうか――のときにクラス全体に向けて伝えた。児童にとって、最終下校時刻を過ぎているから別に問題はないはずだ。授業が終わり、職員室で仕事をして、忘れものをしたのに気づいて教室に戻ったのが16時42分。教室の扉を開けたとき、彼は一人だった。湿気を纏い触れそうなくらい重くなった空気が辺りを埋め尽くす。その空気と共に彼は、島木健太はただ広げたような曇天を眺めていた。

「居眠りしていた」

声をかけたときに返ってきた答えだった。目に隈が浮かびやつれた表情だったので、そんなこともあるか、と勝手に納得して

「雨が降る前に早く帰りなさい」

とだけ残した。傘が無いと言われたから、自分のを貸したことまで覚えている。しかし、今考えれば教室に残っていたことの言い訳だろう。何故、彼は教室にいなければならなかったのか。当時は答えが分からなかった。

その日から、彼は僕とよく話すようになった。

「あのね、先生、今日は図書室で面白い本を見つけたんですよ」

「あのね、先生、今日昼休みのケイドロで初めて逃げ切ったんですよ」

敬語とタメ口を混ぜて、彼は他愛のない話をしてくれた。親と話せばいいのに。いつか

らか、そんな疑問が浮かんで離れなくなった。

「その上着、いつも着てるよな。お気に入りか」

ある日彼に聞いた。ただの雑談のつもりだった。

「はい、昔おばあちゃんに買ってもらったんです」

「そろそろ洗濯した方がいいんじゃないかな。汚れてきてるぞ」

「やり方、分からなくて」

「お母さんか、おばあちゃんに言えばいいじゃないか」

「ママは最近、話してくれないんです。全部、自分でやれって言うし。おばあちゃんは家遠くて、電話番号も分からないし」

流石におかしいのではないか。子育ての一環として、自分の生活を自分でさせることはよくあることだ。けれど、健太くんはまだ小学二年生だ。彼に洗濯を自力でやれと言うのは酷ではないか。たわいのない会話をわざわざ僕とするのも、親が彼とまともに関わらないからではないか。僕は自分にできることを考えた。考えて考えて、それでも島木家に電話する以外の方法が思いつかなかった。

「……はい、島木ですけど」

その日の放課後、行動に移した。健太母は少なくとも電話に出れる状態ではあるようだ。

「もしもし、私、健太くんの担任の田辺克樹と申します」

「あ、どうも、息子がお世話になっております」

「その健太くんのことで少々お話がありまして。本日、本人から聞いたのですが、お母さん最近は健太くんとお話しされないとか」

「ええ、まあ、最近忙しくて時間がつくれないと言いますか」

「服を洗う時間もとれないほどですか」

健太母は、ええと、と相槌とも戸惑いともとれるリアクションを返した。

「本人から聞いたのですが、お母さん洗濯なされないとか。よかったら彼の上着、洗って

やってくれませんか。無理なら洗濯の方法を教えてあげるだけでも」

話の途中で、健太母が大声をあげた。

「うちの方針に口を出さないでください」

ツーツーという音が、僕が選択を間違えたことを示した。しくじった。勢いに任せて突っ走ってしまった。ネグレクトの兆候が見えたということで、児童相談所に連絡を入れると、後日訪問調査を行うとのことだった。

次の日、健太くんは学校に来なかった。連絡はなかったしつかなかった。児童相談所に連絡した後、少し気が重いが、家庭訪問を行うことにした。勤務が終わり、準備をして自転車に跨る。夜になりかけの人気のない通学路は不気味で不安を煽る。それを振り切るようにペダルを回して風をきる。目的地までは予想より早く着いた。呼び鈴を鳴らすと、チェーン越しに女性の顔が覗く。髪はボサボサで隈が濃く、酷くやつれていた。

「どちら様ですか？」

「健太くんの担任の田辺です。今日学校をお休みされて、連絡もつかないので様子を伺いに参りました」

女性は部屋の奥をちらりと見やって答えた。

「ご連絡いただいていたことに気づかなくて申し訳ございません。息子は、具合が悪いようで、そっとしておいてくれませんか」

奥を覗くと、小学生ぐらいの子がうずくまっていた。こちらに背を向けて、足を折りたたんでいる。けれど、生気を感じなかった。

「健太くん、大丈夫？」

「だから、そっとしておいてって」

もしかしたら、何か重い病気にかかって倒れているのかもしれない。そうでなかったとしても、ただの風邪というわけでもないだろう。玄関の靴は2足しかない。児童相談所の職員より早くついてしまったらしい。彼女の制止を気に留めず奥へ踏み込んでいく。ゴミで散らかり放題の部屋を進み、彼の体に近づくにつれ、嫌な予感が高まってゆく。彼の後

頭部には赤黒く染まっている部分があった。顔を覗くと、彼は健太くんだった。頬に触れた瞬間、手に伝う冷たさが予感を確信に変えた。

彼の母親に問題があったのか、他の遠因があったのか、今となっては分からない。だが健太くんが死んだのは、僕が間違えたからだ。僕が彼を殺した。健太くんの現状を早くどうにかしたい。その思いが僕を突き動かしたのだ。

――現在――

算数の授業が終わると、児童が一人近づいてくる。

「先生、分からないところがあるんですけど」

そう言って彼女は僕の前にノートの見開きを置いた。見ると、最初に計算ミスをして、そこから値が全て狂っていた。

「ここで間違えてるな。直したら、ほら、正しい答えだ」

「んん？……ああ、本当だ。ありがとうございます」

説明が終わっても、彼女、笹木香織はまだ教卓の前から離れようとしない。何か言いたげに僕を見上げている。

「どうすれば、計算ミスをなくせますか」

「完全に無くすことは難しいかな。ミスをしないように気をつけるくらいしか、できることはない」

「気をつけるって、どんなふうにですか」

「計算が終わったあと、一回見直して、確認するとか」

「それを何回やったらいいんですか」

「自分が、もう大丈夫だな、と思えるまで」

「思えないんです。どうしても。何回やっても自分が間違ってる気がしてならないんです」

本人の気持ちの問題ほど解決に干渉しづらいものは無い。まず彼女の自信の無さがどこからくるのか見つけなければならない。おおかた、もう六年生だから、受験だとか中学へ

の準備だとかで気が滅入っているのだろうが。

「きっと疲れているからそう思えてしまうんだ。今日ぐらいはもう休んだらどうだ」

そう言って帰した。一朝一夕で済む話では無い。

対応を考えたまま、何も思いつかず翌日を迎えた。この学校では毎週木曜日の昼休みは15分長く、40分もある。なのでときどきクラス全員でレクを行うことが恒例となっていた。受験を控えている子も息抜きになればと参加することを推奨している。6時間目の学活は、レクの内容を決める時間にした。投票を行い、体育館を使いバレーボールをすることになった。参加人数は僕を入れて30人で、6人チームを5つ作りトーナメント戦を行う。仲の良い子同士で集まって、やれ一緒のチームにしようだの、ポジションはどうしようだの、教室がワイワイとした活気に満ち溢れる。その渦中に香織も身を落としていたように見えた。たまたま近くで紗希と舞の二人と話をしていたのが耳に入った。

「香織ちゃん同じチームにしようよ」

「え、いや私は……」

「もう他のチーム入っちゃってる？なら良いんだけど」

「えと、そうじゃなくて、私がいたら足手まといかなって。ほら、私って運動音痴だし」

「ええ？！そんなこと考えて誘ってないよ」

「自信持ちなって」

「気を使わなくていいのに」

「使ってないよ」

「ねぇ香織ちゃん、一緒にやろうよ。お願い」

「そこまで言うなら、いいけど」

彼女の自信の無さは勉強の範囲に収まるものでもないらしい。僕も口を挟みたかったが、やめた。十年前と同じように、変に出しゃばって事を悪くしたくない。その後、人数が足りなかったので、香織と同じチームに僕が入ることになった。

その日の夜は夢を見た。僕は十年前の島木家の玄関に突っ立っている。奥から泣き叫ぶ

声が聞こえて、顔を上げると健太くんが母に殴られている。

「痛い、痛い、やめて」

上擦った声を必死に上げるが、母は殴り続ける。夢で見る彼女には耳が付いていなかった。誰の声も届かないのだ。

「先生、助けて」

消え入りそうな声で、僕に助けを求める。涙の浮かんだ、隈の酷い顔をこちらに向けてくる。でも、僕は足がすくんで動けない。

「先生、痛いよ」

翌日の昼休み。僕は香織が気がかりだった。給食を食べ終えて、体育館の鍵を児童に渡し、給食室まで食器を片付けに行った。その後遅れて体育館に向かう。バレーのクラブ活動をしている子たちが一足先に向かい、ネットを立ててくれていた。トーナメントも彼ら自身で管理していて、すっかり一人前だなと感心していると、先生早く、と紗希から呼びかけられた。もう試合が始まるらしい。

最初のサーブは香織だった。エンドラインに立ち、左手で持ったボールを右手に作った拳で打ち上げた。しかし、ボールは軌道をネットにギリギリで阻まれてしまい、味方コートにあっけなく落ちた。

「ああ、ごめんなさい」

顔を両手で隠して彼女が謝る。

「いい、いい」

「ドンマイ」

チームメイトが励ましながら、ボールを相手チームに投げた。運動が苦手な人は、コートの中からサーブを打っても良いことに先の投票で決まったが、彼女が律義にエンドラインから打ったのは何故だろうか。しかし、彼女の気を悪くする気がして直接聞くことはできなかった。一人で考えているうちに、相手チームのサーブを見逃して僕も

「ごめーん」

と大きい声で謝った。

「先生よそ見しないで下さーい」

チームメイトは辛辣だった。

その日の夜も夢を見た。

「先生、痛いよ」

翌日、紗希と進路面談を行った。受験を考えている児童には、三者面談を行うことになっている。こちらとしても気が重い。それには受験期に我が子以上に気が立っている親御さんと会いたくないという他に、一生徒の親御さんと会うと、十年前のことを思い出してしまうという理由もあった。しかし、彼女の母親は特に神経質になっている素振りを見せず、彼女自身も勉強に特別不安なことも無かったため、ほぼ雑談のように終わった。短い時間で終わってくれるのはこちらとしても大助かりだ。完全に時間を持て余し、図書室で勉強してから帰る、と言って母親と別れた紗希を廊下で呼び止めた。

「ちょっと、いいか。笹木さんのことで聞きたいんだけど」

「何ですか？」

「いや、少し自信がなさそうに見えたから、仲がいいあなたなら何か知っているんじゃないかと思って」

「何かって、何ですか」

「難しいな。えっと……あの子が何か落ち込むようなことがあったとか。知らない？」

「分からないですね」

手がかりが掴めず落胆していると、紗希は続けた。

「ただ、あの子からは消極的な印象を受けます。極端に自分を下げてるっていうか、ちょっと卑屈過ぎないかって思うこともあり……ます」

極端に自分を下げてるというと、検算を何度しても満足しないのは自分の能力を低く見積もり過ぎているのだろうか。

その日の夜も夢を見た。

「先生、痛いよ」

翌日、香織は質問にきた。また簡単な計算ミスである。それを教えると、彼女はしょげた顔をして

「また間違えた」

とこぼした。

「そう落ち込むな。落ち着いてやればできるはずだ」

自分を低く見積もっているだけなら、成功体験を積めばきっと自信もつくだろう。そう励ましたつもりだった。しかし、

「それでできたら苦労しないです」

そう言って彼女は行ってしまった。また間違えてしまった。十年前と同じだ。もう彼女には首を突っ込まない方が、彼女にとっても僕にとっても良いのかもしれない。今の状況を保っていれば彼女は生きづらいだろうが、生きていけなくなるよりは遥かに良い。

その日の夜も夢を見た。

「先生、痛いよ」

そして、香織の進路面談の日がやってきた。

面談の日、僕は資料を用意して教室で待っていた。ノックが三回したので、どうぞ、と促し笹木親子を中に入れた。笹木母が僕の対面に、香織が彼女の隣りに座ったのを見て、僕から切り出した。形ばかりの挨拶を交わして早速本題に入る。

「香織さんの志望校の栗友中学校ですが、成績を見る限りですと、努力圏にいます。ただ、その中でもかなり上の方にいますので、ここから頑張れば充分に狙える圏内だと思います」

「だって、良かったね香織」

「……うん」

「ちょっと、喜びなさいよ。あなたの受験でしょ？あなたが行きたいって言ったからお母さん応援してあげてるんだよ」

「ごめんなさい」

感情が追いついていないだけかも知れないのに、少し言い過ぎではないだろうか。僕の考えが合っているのか分からないが、こんなことで強い口調で我が子に突っかかる親御さんは見たことがない。それでも問題を起こすよりはマシだと言葉を飲み込んだ。とりあえずこの空気を断ち切らなければ。

「勉強に関して不安なところはある？」

香織に質問をする。困ったときに児童に振る悪癖は、十年経ってもついに治らなかった。

「えっと……計算ミスが無くならなくて、確認も、何度やってもダメで」

「まだそんなこと言っているの。いつまでウジウジし続けるつもりなの」

笹木母が口を挟む。

「ねぇ、やっぱり今の環境がいけないんでしょ。だって今までそんな泣き言全然言わなかったもんね」

決めつける。

「他の人とか先生に色々言われて不安にされちゃったんだ。もうそういう人と付き合わないで。あなたのためにならない」

「違う。みんなそんなつもりじゃない。私が全部悪くて」

「あなたは悪くないの。悪いのは他の人たち。いい？」

「……でも」

「でも、も何もない。あなたどうして私の言うことが聴けないの。あなたをここまで生かしてきたのは誰だと思ってるの。そんな人の言葉が聴けないの。あなたのために全部やってきたのに、全部無碍にするんだ。へえ」

「そんなこと言ってない」

「でもあなたが言ってるのはそういうことだよ」

母娘の応酬を黙って見守るしか無かった。彼女が自信を持てないのは、ずっと正解を押

し与えられたからではないだろうか。検算を何度やっても満足しないのは、確かめている自分が正解だと思えないからで、それは今までの経験からそう思うようになってしまったのではないだろうか。バレーボールだって、ルールに則ればエンドラインからサーブを打つのが正しい。彼の姿が、健太くんの姿が香織に重なる。彼も最期は母親と口論になったのだろうか。香織がこっちに視線を寄越す。瞼を頑張って開けているが、少し気が緩めば涙が溢れそうな、潤んだ瞳をこちらに向けている。ここで何もせずに面談を切り上げて、二人を家に帰すこともできる。けれど、健太くんがこの視線を向けてきたら、僕は無視するだろうか。あのときの景色が、ゴミの臭いが、冷えた肌の感触が身体に蘇る。未だに十年前の失敗を引きずって、自分自身を信じきれなくなった教師の言葉に誰が寄り添えるだろう。香織が自分を信じるためには、僕が自分を信じる姿勢を見せなければならない。僕は香織の表情をヘルプコールとして受け取った。

「……少し、いいですか」

「何ですか。娘の自信を奪っておいて、謝罪でもなさってくれるのですか」

「そのことで、少し。香織さんの、最近のお家での様子はどうでしょう。やはり、不安を感じているでしょうか」

「そうなんです。今まで泣き言の一つも言わなかったのに、本当に最近なんですよ、急にいじけちゃって。最近仕事で私も家にいる時間が少なくなってきてですね、私がついていればこんなことにはならなかったと思うのです。今まで全部おんぶに抱っこでわるい虫も追い払ってあげていたのに。それができないからこの子は一人で失敗する危険に晒されて不安な思いをしているのですよ」

「そうでしたか。ああ、お母様も苦労なさっているようで」

「ええそうなんです。でもこの子のためならいいのです。でもずっとこのままの状況にするのも良くないんです。だから、今からでも香織の指導をマンツーマンにしてもらえませんか。周りの人がいるのがいけないんですよ。一人になれれば今よりずっと良くなるはずです」

「そうですね。原因を取り除くことは早急に行うべきだと思います」

「分かっていただけますか。そうしましたら早速明日から香織をクラスから外して下さい」

「お母様の言う通り、香織さんが自信を無くしている原因は、周りにあるかもしれません。けれど、今のやりとりを見る限りですと、クラスを分けなくても、今のお母様が香織さんの力になれることはあるかと思います」

「どうすればいいのですか」

「お母様が香織さんに先に正解を教えたり、間違えることを極度に嫌がると、香織さんも怖がってしまうと思います」

「はあ？何を言い出すかと思えば。私は香織が苦労しないようにアドバイスしているだけです。子供に失敗してほしくない親心が分からないのですか？」

怒り出した。当たり前だ。娘が困っている原因が自分にあると赤の他人に言われて怒らない親などいない。けれどこの人だって悪意を持ってやっているわけではない。むしろケアはこの母親にも必要だ。

「あなたのために、と何回香織さんに言いましたか。その言葉が香織さんの足かせになったのではないでしょうか」子供に苦労をかけたくない親心が分からないわけではない。その親心が、そしてその気持ちを汲んでほしいという思いが、あなたのためという一言に詰まっている。けれどあなたのためという言葉で、香織がその助言を断る選択肢を断ち切ることは香織のためにはならない。僕は続ける。

「お母さんも、怖かったと思います。娘が失敗したらどうなるか分からない。分からないから不安になって、それを取り除こうとして先走ってしまった。けれど、香織ちゃんももうすぐ中学生になるのです。これはお願いです。娘の意見と選択を、信じてあげてくれませんか」

「そんな……私は……でも、香織」

香織母は娘の方を見る。自分に傾倒して、支えになってほしくて見ているのだろう。け

れどそれはまだ歪な支えだ。香織が自分の軸を持てるようになって初めて、彼女に寄り添う安全基地となる。そのためにも香織が自信を持てるように指導を考えなければ。そのとき、香織が口を開いた。

「お母さん。ごめん。私、ちょっと嫌かも。お母さんに何でもかんでも言われるの」

「ちょっと、あなたまで」

「待って、お母さん聞いて。私、お母さんのことが嫌いなわけじゃないよ。大好きだよ。でもね、全部正解じゃなくていいの」

「そんなこと……ない。失敗するのは辛くて苦しいよ。一生忘れられないよ。だから」

「うん、大丈夫。失敗したことがないから分かってないかもだけど、大丈夫。全部受け止められるくらい、強くなるから」

そう言った香織の目は、母を優しく見据えて光っていた。

面談が終わってから、しばらく香織は暗い顔をしていた。きっと母親との関係が崩れたのだろうということは見てとれた。しかし、今までのような計算ミスは減っていった。日を追うごとに香織の表情もだんだん明るさを取り戻していく。そして、3月、受験組もひと段落し特にやることも無くなったため、クラスレクを授業で行うことにした。内容は、何故かうちのクラスで根強い人気を誇るバレーボールにまた決まった。そして、当日。香織はエンドラインではなくコートの中にあるアタックラインからサーブを打っていた。どうやら事態は好転しつつあるようだ。8日後、卒業式が終わると、廊下で香織に呼び止められた。

「先生、面談のときはありがとうございました。自分で踏み出すきっかけになったというか、えっと、うまく言えないけど本当にありがとうございます」

「どういたしまして。それよりお母さんとは大丈夫か？」

「あれから、母とは距離を置くようになりました。でも、嫌いになったとかではなくて、色々自分で決めてみたいだけなんです。今は無理でも、いつか分かってくれるはずです」

少なくとも、虐待に発展していなさそうでホッとした。すると、香織がランドセルの中

から小さい紙袋を差し出した。

「これ、今までのお礼です。良かったら食べてください」

渡された紙袋の中には、贈答用、と書かれた箱が入っていた。上に貼られたラベルには、水無月、生和菓子、の文字が見える。

「えっと、季節外れ、ですよね。でも生八ツ橋売ってなくて、味が似てるから、これも先生好きかなって、思って」

合点がいった。修学旅行のとき、児童に紛れて僕が生八ツ橋を買っていたのを見ていたのだ。二個入りなのは、その日中に食べ切れるようにという彼女なりの配慮だろう。

「ありがとう」

僕は彼女の選択を尊重した。